

教職をめざすみなさんへ

マンガを教える… ということ

文学部国際言語・文化学科

教授 田代しんたろう

僕は今マンガ担当教員として、マンガを教える立場にあります。別府大学に招かれる前にも、東京の専門学校や文化講座でも講師を務めたりと、十数年マンガを教えてきたこととなります。ただ、僕自身は特定のマンガ家の先生に師事したこともなければ、(入門本とかで独習したことは別として)取り立ててマンガの描き方を教わった覚えもありません。マンガは権威に従わない自由な創作物ですから、教わるものじゃない…と実は思っています。マンガを教わろうなんて考えるようじゃ、マンガは描けないぞ…とも思ったりもします。(マンガ担当教員不要ですね。ハハ)

日本人には独特の絵心文化があります。年賀状に自分で描いた絵を添えるなどというのは、日本人独特の習俗です。絵手紙などという《表現ジャンル》もあって、「下手でいい。下手がいい。」などと居直っちゃったりしています。でも、皆がそれを許す。歴史をさかのぼれば、浮世絵や俳画……といった話になるのですが、一般庶民が絵を描くこと、絵でメッセージを伝えることに寛容…という日本の特殊な文化土壌から、世界を席卷するマンガやアニメーションが生まれてきたと、僕は確信しています。絵が下手であっても、意味が伝えられればマンガは合格なんですね。

そんな自由なマンガ創作の分野で、じゃあ僕は一体何を教えれば良いのでしょうか。以下のよう

なことがらを指針としてマンガ創作指導に当たってきました。

◇真っ白い紙に立ち向かって作品を創り上げる楽しみ／創作は無から有を生み出す人間として誇らしい行為です。とは言え、マンガはえらく手間暇の掛かるもので、楽しみの裏側にかなりの我慢と覚悟が必要です。

◇情報の整理と構成の合理的な作法／理解力や分析能力を高める手だてを身につけてほしい。実際の演習では、時系列表や地図表現を使った《図解する力》を養ってもらおうとしています。

◇発想を広げる手だてをアドバイスすること／自分の周辺に散在する知識や情報に広がりを持たせ、視野を広げる中で多くの読者の共感を呼ぶ作品が生まれますし、なにより多くの情報の中から自分自身の発見を得ることが創る意欲を増大させます。

◇発想を広げながらも…創る主体=自分にこだわり、テーマを自分ならではの方向に絞っていく姿勢／マンガは(創作はなんでもそうでしょうが)やはり個性が光るものでありたいですね。自分でしか描けない作品にこそ、創る意義が生まれます。前述したようにマンガ制作には大きな労力が必要になりますから、そういう甲斐がないとモチベーションを維持しきれないという面もあります。考えを広げながら、自分らしさにこだわりテーマを絞り込みながら、更にその上でまた発想を広げる…その追求こそが、ストーリーづくり、マンガ発想の醍醐味と言えます。

別府大学の建学の精神『真理はわれらを自由にする』。僕自身、しっかりその意味を理解しているかは疑問ですが、とても気に入っている言葉です。赴任した時から、カッコイイなあと思ってきました。創設者、佐藤義詮先生は、ご自身の教育理念として《自由は人間性の尊重であり、真理の探究は学問の最終目標でなければならない。その具体的方法は、あるいははなはだ困難であるが…》

と説いておられます。なるほど。

ただ、僕はマンガ家＝能天気な創作者ですので、創る者なりのちょっと勝手な解釈をしています。それはこうです。

真理は真理としてどこかに厳然とあるわけではない。われわれが心を開いて物事に接し、自由に発想して、自分ならではの自由な創作を実現する過程で初めて真理が見え始める。外の世界と自分のパーソナリティを反応させる中に初めて真理への一歩が始まる。

そんな理解のし方はいけませんでしょうか、佐藤義詮先生？

皆さんはどうお考えでしょうか。

ある卒業生と教職への道

文学部史学・文化財学科

教授 利 光 正 文

確か2010年11月の下旬であったと思うが、大学事務局教務課職員から私に電話があり、私の不在中に田邊という卒業生から電話がかかり、鹿児島県の高校教員の採用試験に合格したことを知らせしてほしい、また、詳細は放課後もう一度電話します、との連絡があった。放課後、彼から再度私に電話があった。今、鹿屋工業高校で常勤講師をしていること、今年度の鹿児島県の高校教員採用試験・社会科（地歴）に合格したこと、別府大学の史学科を卒業してすでに12年経つこと、等々をやや興奮しながら早口で報告してくれた。「おめでとう、本当にがんばったなあ、大学の先生方や後輩達に伝えるよ。」と言って、彼の努力が報われたことを心より祝福し讃えた。そして、翌12月の中旬、田邊君の訪問を受け、12年間に亘る彼の教職への道を詳しく聞いた。

田邊憲史郎君は、平成10年に別府大学史学科を卒業した。在学中、4年次生の時、私が卒論指導を担当した。卒論テーマは「アンコールワットの研究」で、アンコールワットの中央回廊の壁面にある日本人の墨書（落書き）について研究した。寛永9年（1632）、加藤清正の旧臣森本義太夫の子右近太夫一房が父母の菩提を弔うためアンコールワットを訪れたことが墨書されている。田邊君は熊本の出身であったので、このことに興味を抱き、研究テーマに選んだ。加藤家のこと、右近太夫一房のこと、アンコールワットのこと、当時の日本とカンボジアとの関係、様々な事柄について、彼は精力的に調べた。特に、熊本の県立図書館に足しげく通い、江戸時代初期の加藤家及び一房のことや東南アジアとの交易等について研究した。別府大学宇佐教育研究センターで行った卒論合宿での発表会において、彼の発表は非常に密度が高く、説得力溢れる内容であった。合宿の夜のコンパで、高等学校の教員を目指していることを私に熱っぽく語った彼の様子を、今でもはっきり覚えている。卒業後の便りは、ないままであった。

5年前の夏休みの終わり頃、田邊君から突然電話があり、熊本県の高校教員採用試験の一次に受かったので推薦書を書いて欲しいとの申し入れがあった。後日、熊本より訪ねて来て、久しぶりに近況報告をしてくれた。講師をしながら、いろんな高校を回り、教員採用試験を受け続けていることを、やや疲れの見える顔で語った。「とにかく、体に気をつけてがんばりなさい。吉報を待っているよ。」と言って、別れた。その後、彼からの連絡はまた途絶えた。

2010年12月の再会時の話によると、熊本県でずっと講師をしていたけれども、2009年3月に鹿児島県教育委員会より連絡があり、鹿児島県の甲南高校で一年間常勤講師をした後、2010年4月より鹿屋工業高校の常勤講師をしている、とのことである。鹿屋工業高校では、校長先生以下、教職員

の方々が教員採用試験の受験に大変理解があり、様々なバックアップをしてくれたことが今回の合格につながったように思うと、田邊君はしみじみ語った。勿論、彼の努力の賜物であるが、周囲の方々の支援も大きな力になることを改めて感じた。授業研究の機会をたびたび開いてくれて、先生方の厳しいアドバイスをいただけたことが大いに役立ったと言う。良い環境に恵まれたことも、彼にとって幸運であったに違いない。

それにしても長い道のりであった。よくがんばったものと敬服する。「常勤講師は授業をするだけでなく、部活の指導も持たされるので大変ですよ。」とも強調した。部活の指導をやりながら、採用試験の勉強もしなければならない。まさに、根性の一語に尽きると思う。険しい道ではあるが、田邊君のあとに続く後輩が一人でも出てくれることを祈らずにはおれない。現在、教員を取り巻く環境は厳しい。しかし、がんばりやの田邊君のことであるから、きっと乗り越えることでしょう。2011年4月より高校教員として新たな旅立ちをする田邊君の前途が幸多きものとなるように、心より祈念する。本当に、おめでとう。

先生の贈り物

食物栄養科学部発酵食品学科

准教授 三重野 佳子

私自身が「教える」という仕事を始めて何年になるのか、改めて数えてみた。教員として働き始めてから19年(たぶん)、さらには「教える」ことによってその報酬をいただく、というありがたい身分になったのは、おそらく家庭教師が最初だと考えると、もっと長い年月「先生」と呼ばれる仕事をしていることになる。元々先生になりた

かった訳ではない。むしろその逆で、親が教師をしていたせいもあり、教員などには決してなるまいと心に誓っていた。なにしろ、うるさい。勉強のことはもちろん、友達づきあい、帰宅時間、その他もろもろあらゆることに口を出してくる。その親のうるささと、私が中学校や高校生の頃の、髪型や制服についての学校の細かい規則や指導とが相俟って、こんなことばかり生徒に言う先生になるなんてとんでもない、と考えていたのである。今考えれば、親のうるさは、先生だったせいというよりも、親として厳しかっただけのような気もする。学校の先生がうるさかったのも、親心だったのではないかと思える年齢に達した。そして、子供の時から、親の苦勞を理解して、ちゃんと言うことを聞く子供だったら、もう少しマシな人間になっていただろうと後悔する自分がある。しかし、こればかりは取り返しがつかない。仕方ないので、親や先生と同じく、後輩の学生諸君に、効果があるかどうかかわからないが、私と同じ轍を踏むな、という説教を垂れてみるくらいしかできない。

思い返してみれば、中学校から大学院にいたるまで、私は生意気な生徒→学生であり続けた。中学校の頃は、先生のホンの些細な注意にも反発し(でも、おとなしい女生徒だったので、面と向かっては何も言えず、同じ過ちを繰り返す)、高校では運動神経はそれほどでもないのにバスケット部に入っていたせいで、体力も運動能力も追いつかず、疲れきって眠る日々、宿題をサボっては先生に叱られた。大学では、大学院に行くことを決めたものの、生来の怠け癖が抜けず、卒業後一年ブラブラし、大学院でもやはりいい学生になれず、それを非難する先生に反発した。そんな生意気な生徒・学生だった私を、実にいろんな先生方が、褒めたりけなしたり、励ましたり叱責したりしてくれた。具体的に何をしてどんなことを言われたのか、忘れていてもたくさんあるが、覚えて

いることを思い出してみると、先生の言い方や態度に多少の間違ひはあっても、その文脈の中で私という人間に向かって放たれた言葉はどれも正鵠を得ていた。そして、その言葉の数々は時折私の胸に去来し、私の身の程知らずを戒め、今の私を形作っていると思う。

何が言いたいのかというと、どんなに叱られても非難されても、逆に褒められても励まされても、人間の一つ一つの言葉には意味があり、重みがあるぞ、ということだ。心に残る言葉というのはきつと何かの意味を持つ。たとえその言葉が本当の意味で伝わるのに年月を要するとしても。だから、今の私を感じるのには、常に素直に人の言葉を聞くことはとても大事だ、ということ。ついつい口から出そうになる「でも…」という反論の言葉をぐっと抑えて（生意気な性格は直らない）、まずは言われたことを素直に「はい」と聞いてみること。それをこんな歳になって私は心がけている（と言っても誰も信じてくれないが）。だから、君たちにはもっと早くから人の話を素直に聞いて、私のように後悔しないでくれよ、と言いたいのだ。

今、私自身が日々学生に接しつつ、言葉を伝える側にいる。一般教養の教員である私には、卒論のゼミのように、学生と密接な関わりを持つ機会がない。普段は英語をよりよくわかってもらう、使えるようになってもらう方法を考えるのに必死だ。従って、別に「これを伝えよう」といつも考えている訳ではないけれど、授業中での会話、担任としての学生との会話、その普段の先生と学生のふれあいの中にしか、何かを伝えるきっかけは存在していない。だから、私の先生たちが私に贈ってくれたみたいに、私も学生諸君に言葉を贈るべく、そのきっかけが出現するのを見逃さないよう、授業中も隅々までこの目を光らせているのである。

「実学を教室で生徒に教えることとは何か」

国際経営学部国際経営学科

准教授 高木正史

平成23年度より、本学に新設された国際経営学部部に所属する3年生が、いよいよ高等学校第一種「商業」、「公民」、「情報」および中学校第一種「社会」の教員免許状取得に「本格的に」臨むこととなる。このことは、当該免許状取得希望者が、日々刻々と変化する性格を有し、かつ実学的要素を多分に備えた諸科目を「生徒」に対して「教室」という限られた枠の中で「教える」ことを通じ、「これからの日本を背負う社会・経済人」を育成するということと同義である。

このことを考えたうえで、筆者は国際経済学部の教職課程担当教員として当該免許状取得を目指す学生諸君に対し、以下の3つの事柄を提示し、それを考慮に入れ、教職課程科目の履修に努めていただきたい。

- ①社会・経済の実態と授業との間に存する壁を撤去する努力をすること
- ②多面的な角度から社会・経済問題を検討する癖を身につけること
- ③社会・経済問題の根底にある理論研究を徹底すること

まず①であるが、国際経営学部で取得可能な社会科学としての科目を生徒が学ぶ際、教科書のみではドラスティックに変化する社会・経済問題を把握することは困難であり、教授者は教材研究に際し、現実の社会・経済の流れを把握しておかねばならない。すなわち、現実の社会・経済問題は教科書における記述以上に実態が早く進行するた

めに、最新の情報を反映させた形で学習指導案、副教材を作成しなければならない。むろん教授者が教科書から逸脱した教育を行うことがあってはならないが、授業では理解可能性の高い例を多用するなど、教授者は生徒を取り巻く社会・経済に関する実態と教科書記述との間に存する壁を可能な限り撤廃するべく努力しなければならない。

次に②であるが、現在は各種メディアやネットにおける情報が氾濫しているため、人は時として情報を事実とは異なる形で歪曲して理解する虞がある。仮にそのような歪曲された情報を教授者が有し、それを生徒に教授したのであれば、教授者は思想的に偏った生徒を育成し、偏った考え方を有した社会・経済人を育成してしまう可能性も否定できない。よって、教授者はときにこれらの情報を参照しようと試みる機会を有するであろうが、バイアスのかかった教育は中学・高校の現場においては決して許されることがあってはならないことを念頭に入れておかねばならない。そのためには、教授者が特定の事物を検討する際には、多面的・客観的な角度からそれを実施することが可能なだけの心的余裕を有したうえで、教授対象となる事柄に対して、ニュートラルな立場に立ったうえで、それを検証することが求められる。そのためには教授者が平素から社会・経済現象を広い視野で客観的に考察する、バイアスを持った目で事物を見てはならない、という観点を意識的に有しておかなければならない。

最後に③であるが、国際経営学部で取得可能な教員免許に関する中・高校教科書の記述は、そのすべてが実学と密接に関連しており、社会に出たうえでの即戦力となりうる材料を提供するものである。然るに教授者は、教授対象となる科目の性質が実学的側面を有するがゆえに、その背景にある理論を習得し、生徒にその実学の背後に存する理論的側面を踏まえた教育を提供しなければならない。つまり、学生は教授者として授業の機会を

有する場合には、実務的な問題のみを実学として単に認識し、それを伝達するのではなく、実学の根底に有する学問的根柢ないし理論を常に研究し、生徒に真の意味での実学を教示可能なようになっておかねばならない。

学生諸君は、これらの3つの要素を常日頃から念頭に置いたうえで、変動する社会・経済問題を教室というミニマムな場で教授可能な教師を目指し、別府大学で培ったあらゆる知識をもとに、次世代の社会・経済人育成に貢献していただきたい。

「感動する授業」を求めて

別府大学短期大学部初等教育科
准教授 小野善寛

新卒3年目のことでした。4年国語「ごんぎつね」の授業、「ごんが兵十の後をつけて行ったのはなぜか」を話し合う場面でした。「神様にお礼を言うんじゃない、ひきあわないな。」の文から、「くりや松たけを持って行ったのは、ごんであることを知ってもらいたかったのではないか」の意見が出されたのです。この場面だけからでは解決できなく、物語全体に読みが広がっていきました。「おれと同じ、ひとりぼっちの」「その明るる日も」「うなずきました」等の語句に目が向き、兵十と友達になりたかったがなれなかった、ごんの切なさに触れ、私は子どもと共に深い感動に浸り、涙したのを覚えています。

この時の感動が忘れられず、授業研究に深く入り込んでいくようになりました。その後、「石うすの歌」「やまなし」等の物語教材を通して、年に1～2回ぐらいしかありませんでしたが、子どもと共に感動に浸る授業がありました。教材研究をする苦しさはありましたが、国語の授業をする

のがとても楽しかったのです。要因を探ってみようと、教育書を読みました。サークルに入って勉強もしました。何よりも、子どもと同じように新しい発見、学ぼうとする意欲、若さと初々しい感動があったと思います。

しかし、30歳を過ぎたころから、感動を味わう授業ができなくなってきたのです。「教育とは、こんなものだ」と、若さ故の驕りがあったことは否定できません。今まで以上に、研修、研究に励みました。研究授業を1年に4～5回はしました。県内外の研修会、研究会に多く参加しました。そして、教材のどこに着目すれば、子どもが分かり、力が着き、感動できるかが、指導計画を立てる段階から大体予想できるようになってきたのです。研修や研究を通して伸びようとする教師としての意欲と、子どもの分かろうとする気持ちがあったからこそ、感動を共有できたのではないかと分析しています。

管理職になりました。しかし、「感動する授業」を求め続け、担任の許可をもらい飛び込みで授業をさせてもらいました。子どもに教えようという意識をなくし、子どもと共に学ぼうとする姿勢で臨んだため、多くの感動を得ることができました。汗びっしょりで授業した「けんかした山」、煙に咽せた「七りん で やいた おもち」の作文、「田中正造」の義人としての生き方等、授業のひとつひとつを鮮明に覚えています。特に「田中正造」の授業は、長い教職生活で、最も納得できる国語の授業でした。

授業は、子どもも教師も楽しいものでなくてはなりません。子どもが分かった喜びを味わうだけでなく、教師と子どもが感動を一つにできる授業こそ、教師冥利につきますものです。そのためにも、研修、研究が不可欠です。皆さんは、教員免許状を取得します。しかし、この免許状は教師としての資質を保障するものではありません。教師としての仕事をしながら教師としての力量を身につけ

ていくことを期待するものなのです。つまり、教師としての出発点を保障したものなのです。

今回は、私の歩んできた道を中心に、述べてきました。教師は、学び続けなければなりません。学び続けることは、教師も子どもも成長することなのです。教師が停滞したら、子どもも停滞します。教員免許状を取得した今、真の教師を目指して、その一歩を踏み出してください。

